## 書評・紹介

長尾雅人著
インド古典叢書
# 摂大乗論　和訳と注解　上・下

片野道雄

この度、標記下巻が刊行された。かねてより広く嘱望されていただけに、仏教学界にとって喜びにたえない。ここに些かその一端を紹介してこの偉業に御礼申し述べたい。

和訳・注解されたこの『摂大乗論』は、西暦四、五世紀ころ、インドのアサンガ（Asaṅga, 無著）が著わした。中観学派と相並んでインド大乗仏教の双璧を形成している瑜伽行唯識学派に属する、体系的な大乗概論として名高い。本書上巻の「序論」にも言及されているように、大乗仏教だけが説かれているというのではなく、原始仏教以来の教理や思想も多く引用せられ、アビダルマ的な議論も縦横に駆使されており、極めて簡潔な表現で、かつ難解ではあるが、そこには全仏教が総合され、全仏教の帰結が集約されている仏典である。総合であるのみならず、後来の大乗の特色的な諸思想が準備されており、日本仏教、中国仏教、インド仏教というように限定することなく、仏教の綱要、あるいは、仏教的な思索の精粋となるものは何かと尋ね求める者にとっては必読の仏典の一つである。

そのような仏典であるところから、歴史を通じて民族をこえて関心がよせられてきていることでもあるが、原典としてのサンスクリットテキストが散佚しているために、昭和の時代に入って、この仏典について、諸漢訳、チベット訳の種々の異訳を対照して総合的な視点に基づいて原初のあるべきテキストの様相が模索されてきた。或いは、いずれかの訳を中心にして検討がなされてきているのである。

本書は『摂大乗論』全文の本邦初訳として上下二巻からなるが、まさしく前者の研究成果の唯一である。五十年に近い本格的な研究を踏まえて、「一般読者のこの摂大乗論に対する一助となることを念願して、なるべく平易な日本語」で紹介されようとして、ここに完成をみるに至った。加えて、懇切丁寧な「解説」「注記」に多くのスペースがとられているのも本書の特色である。豊かな学識によって本論の内容が解明解説されており、和訳と共に「解説」は一般読者のみならず、益するところきわめて多大である。和訳の上欄には親しまれている漢訳の一つ玄奘訳校訂文とその読み下し文とが附載されている。また、巻末にはその巻に収載されている本論のチベット訳校訂文がローマナイズによって掲げられており、さらに、上巻には、本論の序章より第二章に対する還元梵文をチベット訳本文に対応して掲げ、また、下巻の附録には、梵漢索引、経論索引、漢梵索引が収められている。本書の校正も行き届いており、下巻では訂正表のところ以外で九頁和訳注b（→d）の記号の誤植に気付くくらいで、読者への気配りが本書全体にわたって滲み出ている。

本書の内容は次の如くである。

本書上巻
はしがき
主なる略号表
序論——解題に代えて——
摂大乗論——和訳と注解
凡例
序章
第一章　知らるべきものの依り所
第二章　知らるべきものの相
附録　チベット訳『摂大乗論』とその還元梵文（序章——第二章）
本書下巻
はしがき
主なる略号表
摂大乗論——和訳と注解
凡例
第三章　知らるべきものの相への悟入
第四章　悟入の因と果〔六波羅蜜多の行〕
第五章　因と果との修習の類別〔十地〕
第六章　高度の戒学〔菩薩戒〕
第七章　高度の心学〔禅定〕
第八章　高度の慧学〔無分別智〕
第九章　結果としての断除〔涅槃〕
第十章　結果としての智〔仏の三身〕
あとがき
一　第三章—第十章の内容概観
二　訳稿を終えて
上巻訂正表
巻末附録
索引　梵漢索引—経論索引—漢梵索引
チベット訳『摂大乗論』
第三章—第十章の校訂テキスト

『摂大乗論』は序章並びに十章から構成されているが、本書上巻は右に記すように第二章までの和訳と注解である。それら和訳と注解に先立ち、「序論」として「解題に代えて」が五十余頁にわたって掲載されている。この「序論」は八項目から成っており、一層本書刊行の意味を高めている。

その第一、「瑜伽行唯識学派の歴史における『摂大乗論』とその著者」においては、『摂大乗論』の仏教思想史上の位置づけを述べると共に、この学派の始祖として弥勒——無著の名が伝承されていることについて、これまでの学界の研究経過を概説し、そこに見られる弥勒を如何に理解していくか、その方向性が検討されており、この学派の三乗一乗についての言及と併せて興味深いものが扱われている。

『摂大乗論』の序章によると、「阿毘達磨大乗経」の十種のすぐれた特質によって特徴づけられた教説を根拠にして、『摂大乗論』は十章をもって構成されることが窺われるが、本書

「序論」の第二の項は、本論全体の概観であり、第三、第四の項は、本書上巻所載の本論第一章第二章それぞれの主要テーマについて、本論にそってそれらの概要とすべく纏められている。これらの概要はきわめて適切に要領を得て纏められており、本論に基づく学習の方向性もよく示唆されている。既に述べるまでもなく、第一、第二章に繰り広げられているアーラヤ識説、三性説は、この瑜伽行唯識学派にとって中心課題でもあって、その意味からも重要な概説となるものである。

『摂大乗論』では、「阿毘達磨大乗経」が『解深密経』以上に重視されており、それでありながら、この大乗経の様相が未詳である。本書序論第五、「阿毘達磨大乗経について」は、そのような経緯を踏えての論考である。この大乗経の性格については久しく関心がよせられているところでもある。本書は「かなり専門的ではあるが以下に考察しておきたい」としてこの課題を先ず取り上げている。筆者もこの『摂大乗論』によって大乗仏教あるいは、大乗仏典の興起の様相を垣間見る思いを持ったことであるが、本書の「序論」第五項も、この大乗経理解についての一つの方向性を示しており、興味深い論述となっている。

「序論」第六「弥勒所問品について」では、本論に対する無性の注釈の漢訳（玄奘訳）に見られて、それに相当するチベット訳には引用されていない『般若経』の「弥勒所問品」について述べている。この「弥勒所問品」は漢訳に伝承する『般若経』群に欠け、チベット訳大蔵経所蔵の『般若経』にのみ見られるのである。本書は、そのような複雑な事情にある「弥勒所問品」に関する問題を三点に要約して解明を進めている。

第七「般若経からの引用文について」では、本論第二章の中の十種の散乱分別の対治するものの具体性として『般若経』の文を配当して引用されているその経文について、これまでの研究を踏えつつ、問題点の整理とさらなる解明とがなされている。これらは専門的な論考とは言え、重要な視点が教示されているように思われる。

「序論」第八は「摂大乗論のテキストと本和訳」であるが、本書下巻の「あとがき」には、下巻に収載されている本論第三章から第十章に至る本文の内容概観がなされている。要旨を得た仕方で懇切に解説されており、上巻「序論」二と併せて参見されるべきであろう。特に下巻所収の諸章は、専門的にも未解明のところが種々残されている現況を思うとき、それら諸章の和訳、注解と共に諸章の概説の労を取られたことの意味は甚大であると思われる。

上巻収載の第一、第二章は瑜伽行唯識学派の理論的な教義を展開するのに対して、下巻の第三章から第十章に至る八章は実践に関する教義を説くものである、と本書は概説している。第三章――第八章の六章は、第一、第二章に示される学習されるべき対象に随って実践、学習せられることを、又、第九、第十の二章では右の学習、修行の結果が示されている、とも述べている。

第三章は、真実の理としての「知らるべきものの相」への「悟

入」を説き、その悟入の基本的な範型、更には、それに従って、本論の特色的な概念でもある「聞熏習」「意言」を中心に実修者の思索が漸次訓練され、前進し、法界への悟入に到達することが集約的に説かれている。四種尋思、四如実遍智、蛇縄麻の譬喩の説かれているのも本章である。

以下、第四章は六種波羅蜜多を主題としおり、それを悟入のための因となる行として説くと共に、それが悟入の果としても実践せられると説かれているのは本論の特色でもある、と概説されている。第五章は、いわゆる菩薩の十地を、それに続く第六――第八章では戒定慧の三学を説き、第九章と第十章においては、それら具体的な実践、学習の結実が解脱の境地であるとして涅槃が、更に、最高の智の内容として仏身論が説かれて、本論は完結している。本書はそれらの述べるところをつとめて平易な日本語によって提示されようとしている。

本書は、既に言及するように、種々の異訳のある中、そのいずれか一つが訳出されているのでなく、諸訳が総合的に検討されて、原テキストの解明を目指している。その意味からも、本論の和訳がなるについては大変なご苦労が重ねられていることである。筆者も途中から本論を中心とする輪読会の末席で傍聴させていただいたが、チベット訳を中心としつつ、チベット訳に偏しず、一語のために何時間も費やすことがしばしばあって、異訳のそれぞれの文脈や言葉が綿密に検討されつつ、本文の解明が進められていたことを思い起こすのである。本書の内容はこのような吟味が永年にわたって繰り返しなされてきたところによるのであって、また、日本語とはかく用いられるべきものであることを、改めて思いを致したことでもある。

和訳の文中には還元梵語も縦横に附せられており、それらは種々の用例の中から選び出されたもので、和訳となるについての基礎的手続きが参見できることは、『摂大乗論』の理解を推進していく上にまことに有難い。和訳、更には、このような還元梵文、還元梵語について、あるいは些さか理解の異なる見解が出現することも予想されるが、そのことによって本書は左右されるものではない。周到な手続きを経て見事に結実されており、本書は本書として完結した、大乗仏教の精粋を披露する長尾訳『摂大乗論』として、永年にわたって心ある読者に提供するものである。

本書は、一般読者のみならず、仏教学に携わる研究者にとっても宝庫となるものである。

上巻　昭和五七年六月三〇日、講談社、B6判XI＋四四〇頁、附録一〇六頁、四二〇〇円

下巻　昭和六二年四月二〇日、講談社、B6判XIII＋四九〇頁、附録一二六頁、六八〇〇円